

## 松下幸之助記念志財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word)

【氏名】長谷川 敬

【所属】(助成決定時) 慶應義塾大学文学部

【研究題目】 帝政ローマ前期の街道にみる交通インフラ維持の問題

## 【研究の目的】(400字程度)

本研究は、ローマ帝国前半期(前1世紀末～後3世紀前半)において公権力が交通インフラをどのように維持していたのかを解明することを目的とする。具体的には、当時の代表的交通インフラである主要街道とその通行を支援する諸施設を対象に、帝国政府と沿道都市それぞれがどのように連携して、もしくはどのように単独で街道と関連施設の維持を担っていたのかを明らかにすることを目指す。現在、交通インフラの維持は我が国が直面する喫緊の課題であるが、それは申請者が専門とするローマ帝国においても重要な問題であり、広大な帝国領土に網の目のごとく展開された街道網を長期に亘り維持管理していくことは極めて困難な責務であった。ローマ帝国では領内に無数に散らばる地方都市が自治を託され市街とその周辺部を管理したが、その財政規模は小さく、したがって都市当局が街道整備に直接的に関与することもあった一方で、大型インフラの維持は都市有力者や皇帝による寄付に大きく依存していたと推測される。そこで、本研究は、古代ローマの街道、とりわけ現南仏に位置するドミティア街道とその関連施設の維持管理のあり方を明らかにすることでローマの交通インフラ維持の一側面を示し、その上で現代日本社会が直面するインフラ問題の解決の一助なることを最終的な目的とする。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

上述の目的を達成するために、本研究では、皇帝とその代理人である属州総督、そして各都市の公権力を掌握する都市有力者層が、ドミティア街道の維持管理を巡ってどのような相互関係を築き、そして実際にどのように維持管理を担っていたのか、という問いを設定し、その解明に取り組んだ。

本研究の実施にあたっては、まず帝権によるドミティア街道の維持に関する主要史料であるマイル標石碑文の確認・収集・分析を行い、皇帝毎の再整備区間の把握に努めた。さらに、沿道都市当局による同街道の維持管理への関与を考察すべく、当局や当局の意向を受けた都市有力者によるインフラ整備に関係した碑文史料の収集に努めたが、残念ながら該当する史料を確認することは出来なかった。

一方、一連の碑文史料の収集・分析と並行して、実際に行われた街道整備・補修の状況を把握すべく、街道の路盤断面を対象とした考古学調査の成果についても検討を行った。具体的には、フランスの県単位で刊行され、対象県の考古学的知見を網羅的に掲載している Carte Archéologique de la Gaule (CAG) を用いて、確認されているドミティア街道跡の複数個所の路盤形成状況を分析した。これに加え、当初計画では、路盤断面や駅通施設の発掘成果を活用すべくフランスでの現地検分ならびに最新の発掘調査報告書の閲覧を予定していたが、コロナ禍の影響で現地調査はすべて断念せざるを得なかった。

そして、如上の考古学的調査の分析・検討の結果をマイル標石碑文の分析結果と突き合わせることで、再整備対象の区間、時期、整備主体、整備の規模、そして整備主体間の関係を総合的に明らかにすることを目指した。

### 【結論・考察】（４００字程度）

マイル標石碑文の検討の結果、帝政前期に、現南仏に相当するナルボネンシス属州においてドミティア街道の補修・整備を行ったのは、初代皇帝アウグストゥス、第２代ティベリウス、第４代クラウディウス、そして２世紀後半の皇帝で「五賢帝」の一人であるアントニヌス・ピウスに限られることが確認された。（この４皇帝によるマイル標石は計７５個に上るが、それに対し３世紀以降の帝政後期については、８人の皇帝による９個のマイル標石が散発的に知られるのみである。）さらに、興味深い点として、アウグストゥス、ティベリウス、クラウディウスという統治年代が比較的近接した３皇帝が、とりわけローヌ川から現モンペリエに至る同一区間においてそれぞれ補修工事を執り行っていたことである。このように特定期間・区間にマイル標石が集中していること背景としては、地域によるマイル標石の残存状況の差という偶然性も考えられ、したがって１世紀後半以降の皇帝たちによる補修実施の可能性は完全に排除されているとは言えない。

一方、街道路盤に関する考古学調査の結果によれば、ナルボネンシス属州内の複数個所において、路盤の補強や追加が施工された痕跡が確認されているが、その施工回数は帝政期を通じて２～３回に及んでおり、マイル標石から窺える全般的な補修回数とほぼ一致する。また、路盤の調査事例が依然として少数にとどまり、且つ補修年代の確定には困難が伴うため、それぞれの施工がどの皇帝の下で実施されたのかを特定することは困難であるが、一部の事例では、アウグストゥス期または帝政初期に施工されたことが示唆されている。したがって、ごく一部ではあるものの、マイル標石から窺える皇帝主導の補修工事と実際の路盤の補修状況が一致している可能性が明らかとなった。さらに、現状では、考古学調査で確認できるような比較的大規模な路盤補修の回数と、マイル標石が伝える皇帝による補修工事の回数間に大きな相違が確認できないことから、皇帝以外の工事実施主体、たとえば沿道の都市当局や都市有力者による大規模な補修は行われていなかった可能性が強まったと言える。

以上のことから、本研究は、コロナ禍による研究計画の大幅な遅延や混乱のために未だ進行中ではあるものの、ドミティア街道の維持管理における皇帝のイニシアティブ、とりわけ帝政初期における皇帝の積極的な関与の可能性を明らかにすることが出来たと言える。そして、近年路盤調査の成果が徐々に増加しつつあることから、これらの新しい考古学的知見も参照していくことで、さらなる研究の進展が期待できると考える。